



Title	2022年度 大阪大学地域研究フォーラム（OUFAS）例会 における発表要旨
Author(s)	
Citation	アジア太平洋論叢. 2023, 25, p. 67-74
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95103
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

2022年度 大阪大学地域研究フォーラム (OUFAS) 例会における発表要旨

第148回

■日時 4月28日 16:50～

■発表者 菊池泰平 (大阪大学大学院言語文化研究科言語社会専攻 博士後期課程3年)

■発表タイトル 「1960年代初頭ミャンマーにおける「民族団結」をめぐる葛藤—「本当の連邦制」原則とは何か?—

■要約 1950年代後半から62年にかけてミャンマーで生じた連邦運動は、シャン州出身の政治家たちを中心にした、自治要求運動である。現代ミャンマーで少数民族たちが訴える「本当の連邦制」の起源とも言えるが、ビルマ・ナショナリズムを擁護する立場から書かれることの多いミャンマー政治史で、連邦運動が中心的に取り扱われることは少ない。本発表では、連邦運動における少数民族の要求と、それに対する政府の反応を比較することによって、地方格差に関する主張が、政府によって民族問題として矮小化されたことを明らかにする。

第149回

■日時 5月12日 (木) 16:50～

■発表者 下川友菜 (大阪大学大学院人文学研究科外国学専攻 博士前期課程1年)

■発表タイトル 「インドネシアの障害児教育におけるインクルーシブ教育の役割」

■要約 インドネシアでは、1901年にオランダによって障害児教育の概念と教育システムが導入されて以来、発展を続けている。現在では、従来の家庭や特別校のほかにインクルーシブ学校も障害児の教育の場となっており、国際的な動向に合わせるようにインクルーシブ教育の概念がインドネシアの障害児教育に取り入れられ始めている。本発表では、インドネシアの障害児教育及びインクルーシブ教育の現状を分析し、他国のインクルーシブ教育実践例と比較の上で、インドネシアの障害児教育の特徴及び今後の展望について考察する。また、それを踏まえてインドネシアの障害児教育におけるインクルーシブ教育の役割と可能性について検討する。

第150回

■日時 5月19日 (木) 16:50～

■発表者 古谷幸之輔 (大阪大学大学院言語文化研究科言語社会専攻 博士前期課程2年)

■発表タイトル 「インドネシアにおける国民的村落像の形成—アダット法学との関連から—」

■要約 インドネシアのナショナリズムにおいて、その民族精神はしばしば「伝統」的な村落(デサ)に求められた。ゴトン・ロヨン(相互扶助)やムシャワラ(合議)、ムファカット(全員一致)などの概念を通じて理想化されるデサのイメージは、オランダ人法学者らによって20世紀初頭以降に体系化されていったアダット法学の成果がその形成に利用されたと考えられている。本発表では、20世紀前半において、いかにしてナショナルな村落像が形成されていたかについて、オランダ人学者らの著作や、スカルノら民族主義者による記録、日本軍政期に実施された旧慣制度調査委員会や独立準備調査会の記録などをもとに、一考察を示すことを試みる。

第151回

■日時 6月2日 (木) 16:50～

■発表者 沼野凌子 (大阪大学大学院言語文化研究科言語社会専攻 博士前期課程2年)

■発表タイトル 「若者たちは遺骨収集活動を通して、何を見るのか」

■要約 先の大戦における日本人戦没者約310万人のうち、海外戦没者(沖縄及び硫黄島を含む)は約240万人である。故郷から遠く離れた地で犠牲となった人々の遺骨を、日本に、可能ならば遺族の元に帰還させるべく、サンフランシスコ平和条約が発効された1952年(昭和27)

より、日本政府による遺骨収集事業が実施されてきた。ところがこれまでに収容されたとする遺骨は約 128 万柱で、60 年以上にわたる遺骨収集事業の成果も虚しく、未だ約半数の遺骨が日本に帰還していない。2019 年には、厚生労働省による遺骨取り違えの事実上隠蔽という問題も発覚した。このように順風満帆とは言えない日本の遺骨収集事業だが、民間の遺骨収集団体と連携しながら、今もなお地道に続けられている。ここで注目したいのは、「遺骨収集の従事者」である。国による遺骨収集事業が始まってしばらくの間、遺骨収集活動に従事する人々の多くが「遺族」や先の大戦の経験者が主だったのに対し、今日その担い手は先の大戦を経験していない若い世代へと引き継がれている。こうした戦前、戦中の日本を知らない現代の若者が遺骨収集活動に従事するのは何故なのだろうか、彼らは遺骨や、遺骨収集活動それ自体にどのような意味を見出しているのか。本研究では、このような素朴な疑問を出発点として、遺骨収容活動が戦後から現代にかけて、その目的や意味をどう変化させていったのかを辿る。

第 152 回

■日時 6月9日 16:50～

■発表者 岡野翔太（大阪大学レーザー科学研究所 特任研究員／大阪大学大学院人文学研究科 招へい研究員）

■発表タイトル 「戦後日本における「中華民国派」華僑組織の形成（1950-60 年代）—来日台湾外省人を契機として—」

■要約 本報告では、今日、日本華僑研究において「台湾系（中華民国派）」とされる組織が、どのような人びとによって形作られたのかを論じる。主として 1950 年代初頭に、台湾より中華学校の教員や国民党支部の秘書として派遣された人びとらの経歴の検討を通じて、戦前から日本に居住する華僑が、台湾に移転した新たな「中華民国」をどのように想像したのか。そして、台湾に移転した後の中華民国政府が、来日台湾外省人を介して、どのように在日華僑組織とチャンネルを確保したのかを明らかにしたい。

現在、台湾の「中華民国」は政治的民主化と台湾化が進んだことで、過去ほどに厳格ではなくなったが、一九五〇から七〇年代は中華人民共和国と中華民国はともに相手が実効支配する地域までも含めて「中国」であるとし、自らこそが「中国」の唯一の政府であると主張した。いわゆる「二つの中国」である。そして海外に多く存在する「華僑」に対する両政府の争奪戦も見られた。この争奪戦は日本にも及んだ。そして、日本と中華民国の間で日華平和条約が締結された一九五二年、横浜の中華学校をめぐる事件が起こる。それが「横浜華僑学校事件」である。この「学校事件」以降、今日「台湾系」と呼ばれる中華民国派の組織（中華学校、華僑総会、国民党支部など）には、旧満洲国地域や華北などかつての対日協力政権下を生き、国共内戦によって台湾へと渡った来日台湾外省人が積極的に関わりを持つようになった。

一方、「大陸系（中華人民共和国支持派）」の組織に関わる人びとは、来日台湾外省人を政治的対立の中で「台湾特務」など否定的な言い方で呼び、他者化した。しかし、「大陸系」の組織を牽引した、中華民国に批判的な立場に立った人びとの多くも、戦前に日本内地へと渡った植民地台湾を出身とする人びとや、旧満洲国から日本に派遣され戦後も引き続き残った留学生たちであった。

つまり、1945 年以降、新たに在日華僑に関わるようになった人びとが、いわゆる「大陸系」、「台湾系」の組織を形成したのである。このように、従来の在日華僑研究で単に「大陸系」ないし「台湾系」と呼ばれてきた組織群は、ポスト日本帝国期の東アジアの人びとの動態に強く規定されながら、多層的かつ重層的な時期をかいぐった人びとによって形成されたのである。

第 153 回

■日時 6月16日（木）16:50～

■発表者 仙波澄子（大阪大学大学院人文学研究科外国学専攻 博士前期課程 1 年）

■発表タイトル 「19 世紀末から 20 世紀前半のフランス植民地における熱帯農業からみるフランス帝国植民地科学」

■要約 フランスは19世紀から20世紀にかけての第三共和政期に、アルジェリアをはじめアフリカ、オセアニア、インドシナなどを擁する広大な植民地帝国を形成した。その過程は組織的かつ科学的なものであり、被支配地域への「近代性」の導入を伴っていた。特に熱帯地域という本国とかけ離れた環境において農業生産をおこなうことは、入植者たちにとってチャレンジングな事業であった。その開発プロセスを分析することにより、植民地科学が未だ研究の進んでいない農業的側面において帝国にもたらしたものは何だったのかを明らかにしたい。本発表では、先行研究の整理を踏まえて農業に着目することの意義を確認し、今後研究を進める予定の熱帯農業を推進したアクターや植民地科学知について概観する。

第154回

■日時 6月23日(木) 16:50~

■発表者 万斯(大阪大学大学院人文学研究科外国学専攻 博士後期課程1年)

■発表タイトル 「現代中国大学生の「空心病」現象に関する研究——価値観の喪失とコミュニケーション障害をめぐって」

■要約 中国共産党第19回党大会の報告で「中国の特色ある社会主義は新しい時代に入り、中国社会の主な矛盾は、人民のより良い生活への欲求の高まりと、不均衡で不十分な発展との間の矛盾に変化している」と明確に指摘した。物質的な豊かさの上に精神的な豊かさを追求し始めており、精神的な喜びや満足度を向上させることが新時代の任務となっている。中国の大学生は、学生総人数は世界最大の大学生集団であり、年齢で言えば18歳から25歳が多く、身体的にもほぼ成熟していると言える。しかし、10年以上の閉鎖的なキャンパスライフを経て、「大学」という特殊な環境の中で、家庭、学校、社会からの期待やプレッシャーが同時に集中すると、何らかの悪い精神状態や様々な心理的問題が明らかになり、それは彼らの心理はまだ成熟していないことの証明にもなる。また、社会の発展に伴い、中国の大学生の思想的状況も徐々に複雑化、多様化している。したがって、この大規模グループの精神的な健康に注意を払うことは、非常に重要で意義があり当面の急務である。現代中国の大学生がバーチャルな世界に夢中になり、現実の社会に直面したときに<社恐>(コミュニケーション障害)を示したり、社会主義の核心価値観に無関心であったり、精神的な空虚や無意義感を感じやすくなっている。その結果としては、主に<空心病>として現れる。本発表では、現代中国の大学生の価値観の喪失、<社恐>や空虚感に着目し、現代中国大学生に蔓延している<空心病>の心理的問題を考察することを目的としている。

第155回

■日時 6月30日(木) 16:50~

■発表者 菅原由美(大阪大学大学院人文学研究科外国学研究専攻 教員)

■発表タイトル 「16~17世紀のジャワにおけるスーフイズムの変遷」

■要約 ジャワでのイスラームの影響は、14世紀にヒンドゥ・マジャパヒトの王宮の近くにムスリムの墓が建てられ始めて以降徐々に見られるようになり、15~16世紀に北海岸でイスラーム諸都市が活性化した。ジャワでイスラームが受け入れられた背景として、神との一体化を求めるスーフイズムの普及があると説明されてきている。しかし、この「スーフイズム」とはどのようなものであるか、これまで十分な議論がなされてこなかった。

ジャワ現地では、イスラーム教がジャワ島に平和的に広まったのは、15~16世紀に活躍した伝説の9人の聖人(ワリ・ソング)の功績であると考えられている。九聖人伝説はジャワ社会でさまざまな形で生き続けているが、史料が限られているため、その真偽や、時には聖人の存在そのものも証明することは困難である。現存するイスラームの最古のイスラーム写本は、Drewesによって出版されている①Lor. 266「16世紀のプリボン」②Lor 1928「ボナンの書」③Lor 10.811「Ferrara kropak」と呼ばれる3つの写本であるが、これらの写本は、歴史研究のためにはまだ十分に検討されてきていない。本発表では、これらの写本の内容を比較することによって、16世紀から17世紀にかけてのジャワ島におけるイスラーム神秘主義論争を検証する。

第 156 回

■日時 7月7日(木) 16:50~

■発表者 松崎準(大阪大学外国語学部外国語学科フィリピン語専攻4年)

■発表タイトル 「フィリピンにおけるカトリシズムについて—フォークカトリシズムの可能性」

■要約 今日までのフィリピン宗教研究において脱却すべきである課題は、その文化、歴史、経済、社会階層などの多様性を置き去りにした本質主義的な議論の方法であった。特にカトリシズム研究においては、植民地支配からの脱却における歴史的な文脈や「フィリピン人の価値観議論」を背景にして、フィリピン社会をパトロン—クライアント関係という固定的な構造の中に当てはめた議論が従来の研究として展開されてきた。このような植民地言説は R.イレートによって批判された。いわゆる「オリエンタリズム批判」である。そのような文脈からの脱却を試みた宗教的衝動に焦点を当てた議論としてイレートの『キリスト受難詩と革命』を取り上げる。本書の最も有効な視点として、宗教的衝動に現れるシンボルを中心に、「フォークカトリシズム」の観点、つまり、より個人に近いレベルからのダイナミズムの記述方法に注目する。しかしながら、フォークカトリシズムにも依然として検討の余地がある。そこで、現状と問題点について言及し、筆者がいかなる立場でフィリピンのカトリシズムを捉えていくかという指針を示したい。

第 157 回

■日時 7月14日(木) 16:50~

■発表者 朴苑善(大阪大学大学院言語文化研究科言語社会専攻 博士後期課程2年)

■発表タイトル 「タイヤイ移民第1.5世代・第2世代の越境的な社会空間の形成—若者の選択の指向性とSNSを用いた調査について—」

■要約 本研究は、複数の地域を背景に持つタイヤイ移民第1.5世代・第2世代が、かれらのルーツとなる地域や生活する地域の中で自らをどのように位置づけ、どのような選択を行いながら将来を築いていくかについて明らかにしようとするものである。

タイヤイの、現在のタイ国北部チェンマイ県にあたる地域への移住は、近代以前から現在に至るまで継続的に行われてきたと言われている。特に、1980年代半ば以降は労働を目的とした移民が多く見られるようになった。本研究の主な対象は、このような1980年代半ば以降にタイ国に入国したタイヤイ移民の子の世代(第1.5世代・第2世代)であり、現時点において20代前半から30代前半にあたる若者である。彼らは、生涯の大半をタイ国内で暮らしているが、タイ国に限らず、彼らのルーツとも言えるシャン州やミャンマーといった地域にも関心を持っており、越境的な社会空間の中に自らを位置付けている。発表者は、タイヤイ移民子弟らのそのような位置づけを、彼らが使用する SNS (facebook) の中から見出そうとしている。本発表は、2022年8月より実施予定の現地調査と、今後の博論執筆に向けたものであり、暫定的な問いと仮説、具体的な方法論を提示する。

第 158 回

■日時 7月21日(木) 16:50~

■発表者 チャートリー・プラキットノンタカーン(シラパコーン大学 教員)、日向伸介(大阪大学大学院人文学研究科外国学専攻 教員)

■発表タイトル 「階級を火葬する：1932年立憲革命以降のタイにおける近代火葬炉の導入と社会的平等の創出」

■要約 近代タイでは、1932年立憲革命によって政治体制が絶対君主制から立憲君主制へと移行し、民主主義の原理が導入された。本報告の目的は、タイにおける近代火葬炉の導入を事例として、革命を主導した人民党の政権が社会的平等の理念を実現しようと試みた過程の一端を明らかにすることである。

革命以前、バンコクの火葬場は階級によって方法的・空間的に厳然と差別化されていた。これに対し、人民党政権は公設火葬場の設置を計画し、最終的にはヤワラート地区にあるトライミット寺の敷地内にこれを完成させた。出自を問わず同様に、短時間で衛生的に火葬をおこなうことのできる最新の火葬炉を備えたバンコク初の公設火葬場は、平等な国民共同体の創出を目指す人民党の理念を体現する施設であった。また、その火葬炉が実は日本から輸入されたものであったことが、タイ側の公文書から明らかとなった。

以上について、発表者による共同研究の成果の一部として、中間的な報告をおこないたい。

第 159 回

■日時 7月28日(木) 16:50~

■発表者 陳顔開 (大阪大学大学院人文学研究科外国学専攻 博士前期課程1年)

■発表タイトル 「なぜインドネシアのスハルト体制は盤石の基盤を築き得たのか？」

■要約 スハルト体制期はインドネシアにおける最も長い体制期であると同時に、不公平、不平等、抑圧的な政策などネガティブなコメントもよく聞かれていることである。どのように政策で人に非難されながら政治の安定を維持し、最も長い体制期に達成するかということについて、私は興味を持ち、研究するつもりである。現時点では、研究と分析はまだ文献資料にとどまり、主に経済発展、政治安定、民族統合、国際外交、四つの角度から分析している。経済と政治は政権にとって無論基本的な存在であり、インドネシアは数多くの島から構成されている国なので、各民族の統合も一つの要因である。スハルト体制期は自らの足場をささなければならぬ冷戦期に重なったので、外交の研究を必要とする。実際インドネシアに赴いて、インタビューするつもりだが、コロナの現状と自分のインドネシア語の不足のため、現時点では不可能である。それに、現在集めている文献資料によって、以上の四点は実際に繋がり、それぞれ影響し合う。経済発展の成果は象徴と応答—スハルトが欠けていた政治能力—の不足を埋める。国民統合について、イスラム教と華人への規制は国民統一のための上に、政治と経済の各一つの大脅威を消した。国際外交も海外の資本支援とメディアに役に立てた。

第 160 回

■日時 8月4日(木) 16:50~

■発表者 LI CHUNG TAI (大阪大学大学院言語文化研究科言語社会専攻 博士後期2年)

■発表タイトル 「言語の戯れにおける文化的アイデンティティ：香港における「神獣」の考察」

■要約 2009年に中国政府が行った「低俗サイト取り締まり運動」への対抗言説として、「草泥馬」を含むいくつかの「神獣」が作られた。それらの神獣は香港のネットユーザーにインスピレーションを与え、2010年代の間、何十種類もの「神獣」が生み出された。「神獣」の多くは二種類以上の生物から構成されるキメラ的イメージである。「神獣」の解説文には、「擬似日本語」を用いた言葉遊びがみられる。一部の神獣は「ゴールデン神獣バトル」というカードゲームとして商品化された。

本研究は、香港のインターネットで見られる「神獣」をポストモダンフォークロアとして扱い、「神獣」の作品および「神獣」に関するオンライン・コミュニティを対象として、「神獣」とその背後のやりとりを研究する。そして、言語人類学者であるマイケル・シルヴァスティンにおける「言語と文化のネクサス」という概念を参照しながら、政治的ラディカリズムを培ったと言われた香港インターネットの言語使用のパターンの研究を試みる。

第 161 回

■日時 10月13日(木) 16:50~

■発表者 古谷幸之輔 (大阪大学大学院言語文化研究科言語社会専攻 博士前期課程2年)

■発表タイトル 「植民地期インドネシアにおける国民的村落像の形成—アダット法学との関連から—」

■要約 インドネシアのナショナリズム運動において、その民族精神はしばしば「伝統」的な村落（デサ）に求められた。理想化されたデサのイメージの形成には、オランダ人らによって20世紀初頭以降に体系化されていったアダット法学の成果が利用されたと考えられている。本報告では、現在執筆中の修士論文について、論文の前半部分を中心に経過を報告する。具体的には論文全体の執筆の計画と19世紀後半から20世紀前半のアダット法学を含む植民地研究の進展、およびそれらがいかにオランダ領東インドの村落社会を理解していったかについて中心に報告する。また、それらによって生み出された知が現地人エリートによっていかに内面化され、日本軍政期における独立へ向けた国家制度や国家理念をめぐる議論の中でいかなる役割を果たしたかについても触れる。

第162回

- 日時 10月20日（木）16：50～
■発表者 CHEN XUNING（大阪大学大学院人間科学研究科人間行動学 博士前期課程1年）
■発表タイトル 「中高齢ドライバーにおける日本語版運転行動質問紙（DBQ）の開発」

第163回

- 日時 11月10日（木）16：50～
■発表者 宮脇聡史（大阪大学大学院人文学研究科外国学専攻 教員）
■発表タイトル Discourse of the Catholic Church in the Philippines

第164回

- 日時 11月17日（木）16：50～
■発表者 下川友菜（大阪大学大学院人文学研究科外国学専攻 博士前期課程1年）
■発表タイトル 「インドネシアにおける障害者の権利に関する条約批准とインクルーシブ教育実践」
■要約 2006年に国際連合によって採択された「障害者の権利に関する条約（Convention on the Rights of Persons with Disabilities）」の第24条教育第2項では、障害者の教育に関する権利を保障することが求められている。インドネシアはこの条約に2007年に署名、2011年に批准しているが、現状は条約のなかで示されている「完全な包容」という目標に合致しない。修士論文では、そのような現状を踏まえて、障害者の権利に関する条約とインドネシアの障害者の権利に関する条約批准に関する法令を照らし合わせて矛盾点がないか分析する。さらに、国連障害者権利委員会による障害者権利条約の履行に関する審査結果を資料とした文献調査を行うことで、法令上の課題を明らかにする。また、実際の教育現場における課題を析出するために、インドネシアにおいて特別なニーズをもつ子どもたちの教育の場として特徴的なインクルーシブ校で実地調査を行いたいと考えている。本報告では、修士論文の執筆に向けた中間報告と執筆計画の報告をおこなう。

第165回

- 日時 11月24日（木）16：50～
■発表者 陳顔開（大阪大学大学院人文学研究科外国学専攻 博士前期課程1年）
■発表タイトル 「インドネシアの華人表象」
■要約 インドネシアにおけるプリブミと華人の衝突は東南アジアにおいて、最も激烈であり、スハルト体制期にピークに達した。この時期、華人に対する区別、差別が制度化され、華人への迫害が公式なものになった。無論この時期華人は哀れだったが、なぜスハルト、及びプリブミは華人に対してそれほどの悪意を持っていたか？そして、一連の政策の後、華人の立場はどのように変わり、それらは彼らの期待にそうものであったのか？本研究はインドネシアのスハ

ルト体制期の華人表象について、この 32 年の間インドネシアにおける華人のイメージとその変化過程を検討する。可能であれば、その上にプリブミは一体華人がどのようになることを望んでいるのかを探求する。

第 166 回

■日時 12月8日(木) 16:50~

■発表者 池田一人(大阪大学大学院人文学研究科外国学研究専攻 教員)

■発表タイトル 「ミャンマーの『ロヒンギャ』における民族形成と民族政治—1942年から1962年の時期を中心に—」

第 167 回

■日時 12月15日(木) 16:50~

■発表者 村上忠良(大阪大学大学院人文学研究科外国学研究専攻 教員)

■発表タイトル 「タイにおけるパシュトゥン系住民のネットワーク形成」

第 168 回

■日時 12月22日(木) 16:50~

■発表者 川口小太郎(大阪大学大学院言語文化研究科言語社会専攻 博士前期課程2年)

■発表タイトル 「イブン・アルムカフファと『カーラとディムナ』 翻案が自著に与えた影響」

■要約 アラブ古典散文作品である『カーラとディムナ』とその翻案者イブン・アルムカフファは多く研究対象とされてきたが、イブン・アルムカフファの数点ある他の著作作品と彼の翻案作品である『カーラとディムナ』を比較、検証する研究はまだ進んでいない。本研究では、『カーラとディムナ』の中でも、彼の作品との関係があると考えられる物語「ライオンと牛」と「ディムナ事件の取り調べ」を取り上げ、彼の著作である『大アダブ』、『小アダブ』、『リサー・アッサハーバ』を比較してゆく。そしてそこからイブン・アルムカフファが、自著の執筆に際して『カーラとディムナ』の翻訳・翻案から思想、構成、修辞学的特徴を採用した可能性を探るものである。

第 169 回

■日時 1月12日(木) 16:50~

■発表者 菊池泰平(大阪大学大学院言語文化研究科 博士後期課程3年)

■発表タイトル 「大英帝国ビルマとシャン連合シャン諸州における自治論の形成」

■要約 本発表では、連合シャン諸州(現在のミャンマー・シャン州)を統治していた藩王たちが、1930年代から47年に訴えた自治とは何かを明らかにする。彼らを植民地統治の手駒として位置づけてきた政治史研究は、植民地行政官と藩王たちの議論を等閑視し、ビルマ独立に対する藩王たちの役割を過小評価してきた。そこで、大英図書館所蔵インド省文書群や、タトン藩の藩王サオ・クンチが記したパンフレットの収集と読解により、彼らが植民地行政官との交渉を通じて、連合シャン諸州内の統合や、ビルマ本土との連邦を目指すようになった過程を明らかにする。さらに、それらが現代ミャンマーで国民統合の象徴されるパンロン会議を開催する動機となった可能性を指摘したい。

第 170 回

■日時 1月19日(木) 16:50~

■発表者 梶原悠(大阪大学外国語学部イタリア語専攻4年)

■**発表タイトル** 「イタロ・カルヴィーノ『不在の騎士』における狙いとその実践——Nota 1960を手がかりに」

■**要約** 20世紀のイタリアの作家イタロ・カルヴィーノは、特異な語りや物語の構造がその作品の特徴の一つとされている。事実、そうした特徴が顕著に見られるのは後半の作品である。しかしながら、一般に寓話的と評価される「我々の祖先」三部作、特に『不在の騎士』という作品には、語りや構造上の工夫が多く見られる。これは、後半のカルヴィーノ文学の特徴の萌芽と考えることができるだろう。そこで本発表では、カルヴィーノ自身が「我々の祖先」三部作の解説を行った Nota 1960 から当時のカルヴィーノの語り・物語への関心を確認し、そのうえでそうした関心が具体的にどのような仕方で作品に反映されているかを明らかにする。

第171回

■**日時** 1月26日(木) 16:50~

■**発表者** 古谷幸之輔 (大阪大学大学院言語文化研究科言語社会専攻 博士前期課程2年)

■**発表タイトル** 「植民地期インドネシア・ナショナリズムにおける村落像の形成」

■**要約** インドネシアでは村落(デサ)共同体の「伝統」に基礎を置くような諸概念がしばしば強調されてきた。具体的には、ゴトン・ロヨン(相互扶助)、ムシャワラ(合議)、ムファカット(全員一致)などの「伝統」である。これらはいずれも農村における慣行にその起源を持つものだと考えられている。そもそも、インドネシアのナショナリズム自体が「伝統」的な共同体として理想化されたデサのイメージと分かち難く結びついてきた。理想化された村落社会のイメージとインドネシアのナショナリズムの関連は、これまでオランダの植民地統治の学問的基礎となるアダット(慣習)法学に関する研究の中で度々触れられてきた。

本発表では、オランダ領東インドの村落社会がオランダ人の学者や植民地官僚たちによって再構築され、その成果がナショナリストらによって取り入れられ、ナショナルな村落像やそれに基づく理想的な国家像として昇華されていく過程をアダット法学やその他のインド学に着目しながら脱構築していく。また、それによってアダット法の成果が「伝統」的なデサにおいてみられる反個人主義的、反リベラル・デモクラシー的、有機体的概念としてアダット法学者スポモを介してスカルノに取り入れられていったという議論を批判的に再検討する。